

## 改正児童虐待防止法成立に、ふと思うこと

4 / 7 に改正児童虐待防止法が成立した。虐待の範囲が「受けた児童」から「受けたと思われる児童」に拡大した。極論かも知れないが、子どもの前での夫婦喧嘩も、精神的虐待になりうるということである。また、連日痛ましい虐待事件が報じられている。個々の事件の背景には、複雑な要因があるのだろうと思う。

それはさておき、こんなにも親による虐待が連日報じられる現代文明という背景に、ふと思うことがある。今の時代は確かに物質的には便利な時代。洗濯機、炊飯器、等々、マニュアルを参照すればボタン一つで結果が手に入る。そうした感覚でついつい無意識の内に子育てをしているのではないだろうか。子育てはこのボタンかなと押すが、子どもは機器ではなく、親の思う通りの結果（表情・行動）が現れるとは限らない。「(育児書という)マニュアル通りにならないのはどうして？」という戸惑いになり、つい感情的に子どもに手をあげたりする。

また、魚の絵を描かせると、切り身一つを描く幼児もいると聞く。芋掘り体験保育と称しながら、既に掘り起こした芋を拾うだけの幼稚園もあると聞く。こうした話も、現代文明が便利さや機能性の追求を優先してきたが故に、個々の人間が、一つ一つの作業の結果に至る過程を体験・思考する必要性がなくなってきた社会現象の現れではないだろうか。こうした現代文明の中で育ってきた行動パターンを云々しても、「三つ子の魂、百まで」ではないが、育つ文明の問題を抜きにしては、当分虐待問題は少なくならないと思えてならない。

倉本聡は富良野塾の新人教育の最初の課題として、各グループに一羽の生きた鶏を与えての料理を課すという。つまり、パック入りの鶏肉を単に調理しておいしいと食べるだけでなく、鶏肉料理を食できる過程を実体験させ、パック入りの鶏肉が他の人の作業のお陰（共存）であることを理解させ、また、人間は他の命をいただいて生きていることを実感させる為であろう。正に総合教育である。

アメリカの先住民族のよく使っていた言葉に、「ミタケ・オアシン（全ては、係わり合っている）」という言葉があるという。やはり、虐待問題を一つの社会問題としてのみ対応を考えるだけでなく、環境問題を含め「全ては、係わり合っている」という観点から、真に人間が望む文明の発達とはどういうことかを、我々一人一人が自らに問い直す作業も必要なのではないだろうか。